

国民幸福度を上げるために

稻垣久和

1. 問題の所在

キリスト教教育センターは成人教育の目的で共に学び合う場として活動していました。しばらく途絶えていた後に再開するにあたって、成人教育の意味をもう一度じっくり考えるプラットフォームが必要だと思っています。

成人教育とは社会人としての大人の再教育または現代的にはリスクリソースとも言うべきものでしょう。キリスト教陣営から見ると戦後の民主主義社会の建設当時とはまるで異なる風景が出現していて、宣教がその事態に適応できずほとんど進展しません。それどころか逆に下降線をたどっています。なぜなのか。

「国民幸福度を上げる」、奇妙なタイトルを付けました。まるで政治家かどこかの役所の研修会の講演題のようです。しかし長く公共哲学や神学に関心を持ち大学で研究と教育それに地域福祉の実践に関わってきたものとして、日本のキリスト教のアイデンティティがここにあると思うようになりました。参加者は教育関係の方が多いかもしれませんので教科書、特に近代キリスト教に触れたものを開いてみると必ず賀川豊彦と南原繁のことが出てきます。残念ながら日本の教会史は、この両極端にある二人の働きを十分に評価できていません。日本の教会が賀川と南原という左右に両翼を広げるときに「国民幸福度を上げる」ということが、教会のミッションと深く関係していると了解できるのではないか。もっとも、その詳細は今日のシンポジウムの課題ではありませんが。

こと一般社会の「教育」に関して言えば新しい視点もいくつか出されています。例えば高校教育では一昨年から「公共」なる科目が入り、現代社会を総合的に見る視点が導入されています¹。

現代政治が左右の陣営に關係なくどこの国も、いわば専制主義化していることは日々のニュースの伝えるところです。その中で民主的な市民社会を育てていくにはやはり教育しかありません。互いが学び合う場が必要ということです。市民社会をくくる概念を人権と平和と呼んでよいでしょう。ところが十分に経済発展を遂げ G7 と称する民主的な国際グループの一員に数えられる日本で、国民幸福度、特に女性の地位や子供の人権の指標が著しく低い、ここにあえて公共性という概念でこれら人権尊重の必要性を覚えるゆえんです²。子供

¹ 鈴木寛・他著『高等学校・公共』（教育図書株式会社、2024年）

² 筆者はかつて『公共福祉という試み』（中央法規出版、2010年）『公共福祉とキリスト教』（教文館、2012年）などでこれらを強調した。

については PISA の統計がよく知られています。高校生の「生きる意味」への意識が 73 か国中で最低です³。

国民幸福度は GDP という指標以上に 21 世紀の日本にとって重要です。西欧の大國に比べ北欧諸国ことにデンマークの国民幸福度が高いことが有名です。キリスト教の歴史と深い関係があります⁴。かつて賀川もデンマークを訪問しそこからヒントを得て日本に農民福音学校を建てていきました⁵。

現代日本も、特に労働環境について多くの課題があります。総じて人間の労働の意味の再考が必要です。資本主義社会の労働力商品（マルクス）の問題性や労働の意味の三区分（アーレントの労働、仕事、「活動」）も重要な視点を与えます⁶。「活動」の基本は対話しつつ「他者性」への理解を増すべきだ、すなわち公共性の確立ということでした⁷。現代欧米の若者の言葉では DEI ということでしょう。人種や生き方の多様性を認める、男女は異なる、また大人と子どもも異なる、しかし公正に社会包摂すべきだ、と。

南原は彼の政治哲学のキーワードとして「正義」をあげました。また「正義の倫理」に加え、男性優位社会を是正するものとして、キャロル・ギリガンが女性の視点から「ケアの倫理」を提起したことは有名です。他者をケアすることの大切さ、またケアラー（ケアする人）の尊厳を確保すること、しかし近年の子どもについてのヤングケアラー（子どもによる家族ケア）は問題をはらみます。高齢者ケアについては心身の老化への予防医学と共に「ポジティブ心理学・精神医学」のような各人の幸福度をあげ⁸、それによって健康寿命を延ばす成人教育も大切でしょう。

それでも限界があります。動物である以上、人間に老化は避けられない。そして、老化は日本のような超高齢少子化社会であれば文明そのものにも言えることなのです。むしろこちらを強調したい。今必要なのは市民が皆「ケアする人になる」社会であり、さらに突き詰めるならば“緩和ケア”をする人になるということでしょう。緩和ケアは終末期医療の言葉で、死の直前まで痛みを取り除きつつ尊厳ある生を全うするための患者へのケアです。これが比喩的に現代文明特に“消滅自治体”問題を抱えた、縮小しつつある日本文明に言えることだと思います。グローバルに過酷な競争と格差社会ゆえに多くの人たちが痛みを感じてきている。地球の温暖化現象、気候変動の過酷さ、格差社会の進行、核戦争勃発の危機などある意味では終末的状態といえます。社会の直面する痛みを軽減するために社会的な意味での緩和ケアの方向ないしは“緩和ケア社会”への展望を探りたいと願います。大切なのは経済成長ではなく、国民の幸福度を上げることです。それを国に頼るのでなく市民の力でや

³ 稲垣・水山著『閉塞日本を変えるキリスト教－公共神学の提唱』（いのちのことば社、2023 年）111 頁

⁴ A・ホルム『概説 グルントヴィ』坂口緑他訳（花伝社、2014 年）

⁵ 拙著『働くことの哲学』（明石書店、2019 年）268 頁

⁶ 拙著『働くことの哲学』53 頁、138 頁

⁷ 鈴木寛・他著『高等学校・公共』7 頁

⁸ 拙著『働くことの哲学』290 頁

る。

2. なぜ公共神学なのか

“緩和ケア社会”の根本の発想は聖書的な人間観、社会観からきていると考えています。大きく分けて二つあります。聖書のルカ 10 章の善きサマリア人のたとえ（「あなたも行っても同じようにしなさい」）。また創世記 1:28 の地の管理者の使命（スチュワードシップ）、これらを私は神から人へ信託された「ケア命令」だと言ってきました。まず、傷ついた人々をケアせよ、そして地球の被造物をよくケアせよ、と。

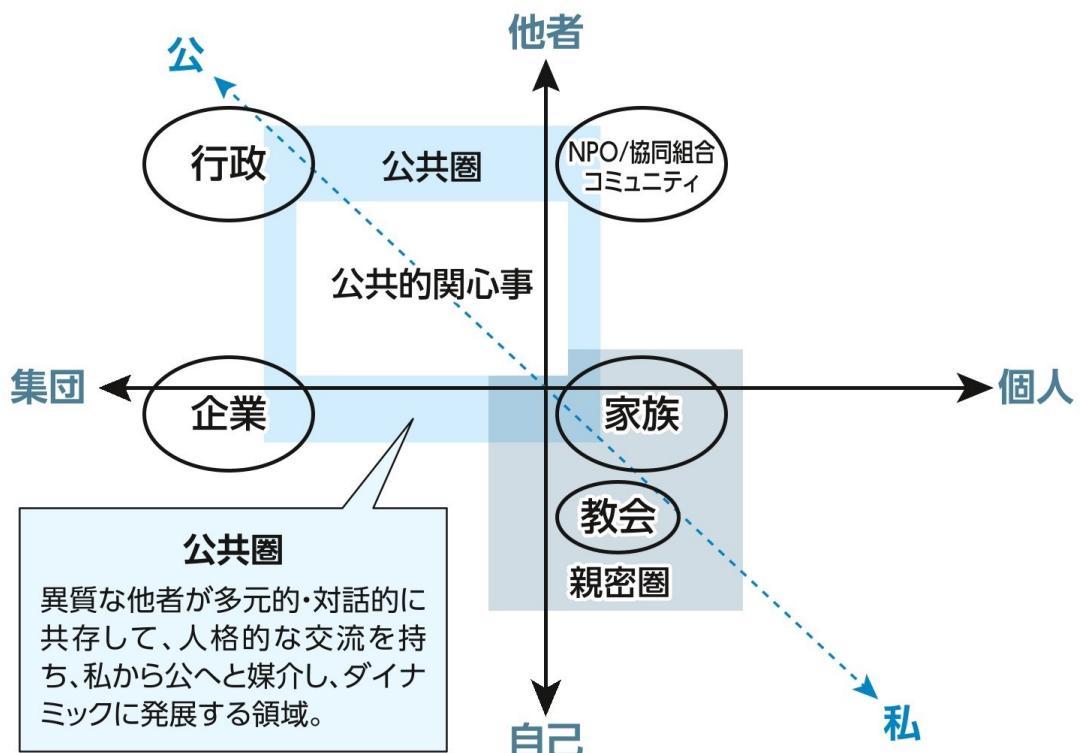
そもそも聖書は神から人間へのメッセージ、人間が創造された目的、人間が人間らしく生きるにはどうすればいいのか、そして最終的に人間はどこに行くのか、これらを告げています。個人の救済と同時に共同体の救済と警告を語ります。特にグローバル危機、終末的事態に入った現代はまさにケアの中でも緩和ケアの時代に移行したと理解できます。ただし、聖書の見方における終末はむしろ完成の時ということです。19世紀後半の世界のキリスト教は大宣教命令の時代、日本もその恩恵をこうむってきました。そして21世紀のキリスト教は「ケア命令」でも特に緩和ケア命令の時代です。緩和ケア命令には「平和をつくり出す」（マタイ 5:9）ことも含まれます。今も戦争がやみません。戦争の痛みを取り除く。公共圏に出て行って隣人と共に平和を達成し、“構造的暴力”的痛みを軽減する。日本の平和憲法はその指針です。

現代人はホモ・サピエンスではなくホモ・エコノミクス（経済人間）となってしましました。すべてが金勘定です。賀川豊彦が依拠したジョン・ラスキンの有名な言葉「生の他に富はない（There is no wealth but life.）」を思い起こす時です。聖書の人間像はホモ・エティックス（倫理人間）であります。隣人を愛せよ、と。現代のように新自由主義的政治経済が席巻した社会は、あらゆる分野が市場化されてしまいます。10年前に亡くなった経済学者の宇沢弘文は市場化の外にあるものとして自然環境、社会的インフラそして制度資本の三つを「社会的共通資本」と呼びました⁹。制度資本には医療制度や教育などが入ります。そしてこれらを管理するのは国家ではなくコモンズの市民、特に専門家による信託（fiduciary）だと思いました。私はさらに一歩進めてこれは神からの信託だ、と言いたい。今日の成人教育の場で議論したいのは公共神学ということです。

まずは親密圏と公共圏の区別が必要です（下記四セクター論の図参照）。教育制度は第3セクターに属します。しかしキリスト教教育センターは第3, 4セクターの協働作業によって公共圏へと発信する使命を持っています。親密圏にある教会（第4セクター）は神を礼拝する人々の群れです。公共圏とは何か。それは異なる立場の人々、他者性の強い人々による討議の広場です。公共圏で平和の創造をはじめ、他者と協働して多様なケアを実践する神学、

⁹ 稲垣・土田『日本型新自由主義の破綻』（春秋社、2020年）213頁

「痛みを取り除く神学」が公共神学です。人間は誰もが幸福に生きたいと願っています。公共圏の人々に「神の国」の意味は分からなくても、「神と隣人を愛せ」「地の塩、世の光であれ」というイエスの言葉を公共圏に“翻訳”すれば、それは「国民の幸福度を上げる」となります。公共神学は「神の国」¹⁰の完成のために労する神学です。終末的時代の公共神学はまさに「希望の神学」となっていきます。

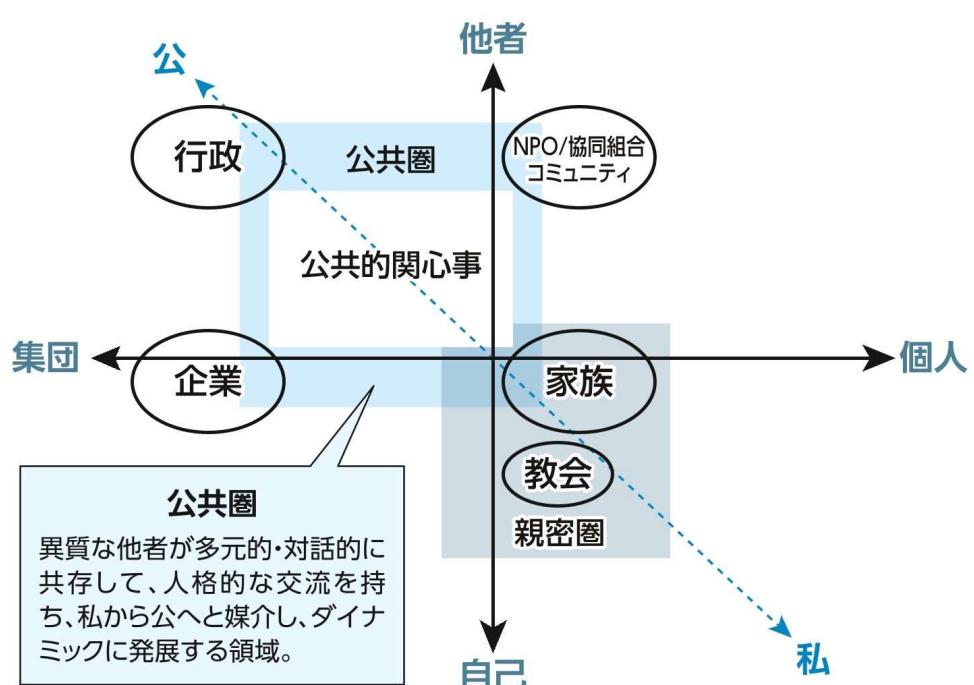


¹⁰ 拙編『神の国と世界の回復』(教文館、2018年)

国民幸福度を上げるために —公共神学の提唱—

稻垣久和

1



2

戦後民主主義の時代とその変遷

- 1945年7月16日、核実験成功。7月26日ポツダム宣言→ヒロシマ
- 1945年12月に日本協同党出発（賀川豊彦・三木武夫ら）、しかし55年体制で自民党と社会党の二大政党に吸収される。
- 1946年8月に南原繁が貴族院本会議で吉田茂首相に新憲法草案の「天皇の地位」と「9条の非武装」について質問
- 1947年日本国憲法の施行と日キ教団・プロテスタント各派の再出発
- 1951年日本の主権の回復と平和条約、片面講和

3

福祉国家への歩み？

- 1973年のオイルショック後もGDPは伸び続ける。1985年に中曾根首相が靖国神社公式参拝→戦没者追悼と戦争の記憶を=記憶の宗教としてのキリスト教は？
- 1990年のバブル崩壊とその後の失われた30年
- 2000年の地方自治法、社会福祉法改正、中央集権から地方主権
- 2024年国民幸福度は世界51位 → 1人あたりGDP、社会的支援、健康寿命、人生の選択の自由度、寛容さ、腐敗の少なさ

4

戦後民主主義の転換

- 教育基本法の改正（2006年）→「公共の精神」の導入
- 2023年高校教科書に「公共」という科目が入った→個人主義的民主主義が戦後のキリスト教に親和的な時代は終わった。協同民主主義（公共の福祉）。
- アーレントの「人間の条件」に見られる「労働」観は労働、仕事、「活動」（=他者との対話による「公共性」）。
- ギリガンの「ケアの倫理」とジェンダーギャップ
- 公共圏でのグローバル危機（終末感）→核汚染（フクシマ原発事故）と気候変動の時代

5

神学の課題として

- 二つのケア命令→①被造物ケア（地の管理責任＝創世記1章）②隣人ケア（善きサマリア人＝ルカ10章）
- 痛みを緩和する働き（緩和ケア）の時代は終末期→親密圏の神学から公共圏の神学への転換→公共神学
- 公共圏の人々の恐怖心＝終末感（核汚染と気候変動）はどこから由来するのか → 産業革命後の人々のライフスタイル



善惡の木から取って食べたこと（原罪）の自覚とその結末は個人主義では解決できない→原罪という抽象的物語の解決がキリストにある！

6